

## 東京五輪雑感

—子どもたちに五輪の本質が伝わったか—

三浦捷也

(三浦歯科医院 院長)



終わりの見えない新型コロナウイルスとの闘いの真ただ中に、200を超える国・地域から1万1千人もの選手が集まった東京五輪が史上初の1年延期と無観客。57年ぶりの東京五輪は試練の17日間であった。

この間、国内では感染が急拡大し、多くの国民の心配と強い批判の中での強硬開催には、それぞれの立場から様々な意見が聞かれた。

▷東京五輪の大会名誉総裁を務める天皇陛下は開会式でコロナ禍で苦しむ国民を考慮され、「祝う」表現を避け、「記念する」に変更された。▷東京五輪の最高位スポンサーを務めたトヨタ自動車は新型コロナ拡大下での開催に反発する声に配慮し、五輪に関するテレビのCM放映を国内で見送った。▷新型コロナ対策会会長尾身茂氏は、専門的立場から、五輪開催は「普通はない」「やるなら強い覚悟」と再三主張していた。▷国際オリンピック委員会（IOC）ジョン・コーツ副会長は記者会見で「緊急事態宣言下でも五輪は開催できる」と発言。▷IOCバッハ会長は閉幕後「東京五輪は成功」と手放しで評価した。▷菅首相は「国民の命と健康を守るのが私の仕事」と語り、開催基準は示さなかったが、開催する意欲を強く滲ませていた。

急拡大するコロナ禍での開催には慎重論と積極論とが常に絡み合っていたが、とりわけ積極的に開催したい側の本音と思惑が見え隠れしていた。

17日間、終わってみれば、東京五輪は最初から最後まで、本来あるはずの臨場感も観客とアスリートとの一体感もなく、「平和の祭典」としてのスポーツ大会としては不自然な大会という印象が強かった。大会は日本選手の活躍でメ

ダルラッシュに沸き、国民に勇気と感動を与えた。しかしながら、その一方でコロナ禍で競技によっては予選に出られなかった選手もいる。ワクチンの普及が進む国と、そうでない国とで厳然とした格差があるという報道もあった。東京五輪は世界の大会としてみた場合でもアンフェアな大会と言わざるを得ない。

◇

近代五輪の創設者であるピエール・ド・クーベルタンの「オリンピックは勝つことよりも、参加することに意義がある」はオリンピックの内在的意義の重要性を説いた有名なことばだが、今は死語になりつつある。

57年前に見た映画「東京オリンピック（1965年）」をふと思い出すことがある。はるか上空の青空に自衛隊の航空機が壮大な五輪の輪を描いた光景だけが、なぜかいまだに印象に残る。そこには国力を結集した派手な演出はなかったが、逆に簡略化された美しさがあったように思う。

近年、世界の平和の祭典であるオリンピックは過剰なメダル争いと、国威発揚に利用する方向が強くなった。むごたらしい事件が頻発している現状で、スポーツ振興は社会を再生させる一助となる。だから、国を挙げてスポーツの普及を図ることには大賛成である。しかしながら、こうした動きはさらに勝利至上主義を加速させ、教育の一環である中学生の部活動や年端の行かない子どもたちのスポーツまで必然的に勝つことへの体制が敷かれる。その過程で、スポーツ嫌いや、部活動からのドロップアウト、燃え尽き症候群も生じている。

近代五輪は、元々神にささげた古代ギリシャ

の祭典競技だった。4年に1度の開催に当たり、ギリシャ全土で都市国家間の休戦が求められた。五輪憲章は「機会の平等、友情、連帯、フェアプレー、相互理解を求め、人間の尊厳を保つことに重きを置く社会の確立」をうたっている。また、オリンピックの「根本原則」ではオリンピックは「スポーツを文化・教育と融合させ、生き方の創造を探求するものである」とも説明されている。

五輪は単に世界一を決める場ではないはずだ。五輪がその他のスポーツイベントと異なるのは「世界の平和」という理念があるからなのだろう。理念がなければ、ただのスポーツにすぎない。東京五輪は残念ながら、その理念が語られないまま閉幕したように思える。スポーツにおいて、勝利、メダル獲得が二の次と軽視するつもりはないが、五輪は勝利だけでは不十分だと思う。以前、サッカーのなでしこジャパンが、ワールドカップで優勝と共にフェアプレー賞も同時に受賞した。私は日本代表選手には「強い」だけでなく、さらに「フェアな日本」を期待したい。そこから、友情、連帯が生まれる。そこに「平和の祭典」としての五輪の意義がある。

五輪憲章に書かれていることと、IOCの実際にやっている行動とは乖離している印象が強い。加えて、五輪貴族と揶揄されているIOC委員の傲慢体質が、コロナ禍での東京五輪で「五輪の問題点」として、はっきりとした形で浮き彫りになった。更にコロナ禍で苦しむ患者と、それに立ち向かう医療関係者との闘いを目の当たりにし、開催国でありながら正直なところ私自身、心の踊らない、心から楽しむことの出来ない東京五輪となった。

政治家は五輪招致、開催のために、あらゆるものを都合よく利用してきた。招致時に唱えた復興五輪、コンパクト五輪も、コロナに打ち勝つ証も消えた。五輪は政権を維持するための道

具になりつつある。自由で自主的営みであるスポーツが、あまりにも政治的、経済的に利用されている。そこが気になる。



コロナ禍での東京五輪。夏休み中の子どもたちの多くは自宅のテレビの前で声援を送ったことだろう。子どもは東京五輪の熱心な観客である。東京五輪の開催は、子どもたちに五輪本来の意義・理念を次世代に改めて伝える絶好の機会だと思っていた。実際にテレビの前の子どもたちに「平和の祭典」がどう映ただろうか。前組織委員会会長の森喜朗氏の女性蔑視発言や、開閉会式直前のチームスタッフの辞任など、競技以外でも五輪に相応しくないことも相次ぎ報道された。子どもたちは大人の言動を鋭く観察している。私は子どもたちに五輪の本質が十分に伝わったとは思っていない。

東京五輪では過去最多となる27個の金メダルを含む58個のメダルを獲得した。五輪が終わって約6割の人がやってよかったという結果が出た。これはスポーツを通して多くの人が感動したからであろう。でも「五輪」の評価は、「スポーツ」と切り離して、きちんと五輪に関する問題点を検証する必要がある。

五輪の実情は、規模が肥大化し、目にあまる商業主義、「国威五輪」の印象が更に強くなっている。

一方、国内のスポーツ界の周辺を見渡すと、その強弱はあるにせよ、改善すべき点も少なくない。決してIOC、五輪だけの問題とは言えないように思える。今回の東京五輪を襲ったコロナ禍を「パラダイムチェンジ」と捉え、五輪の進むべき方向だけではなく、日本のスポーツのあり方、位置づけを再検討する契機にしなければならない。大人には将来のスポーツ界を担う子どもたちに「スポーツの価値を伝える責任がある」からである。